

大学入学時の志望理由と卒業後の進路について

新井隆也

第一章 はじめに

私の研究テーマは「大学入学時の志望理由と卒業後の進路について」である。なぜ、大学入学時と卒業後を比べたいのか、その研究動機として理由が2つある。一つ目の理由は、入学した際の志望理由や大学生活でやりたいことは、卒業後の進路に大きく関わってくるからである。入学時にほとんどの学生は、自らが思い描く将来の自分になるため、大学で何を学んでいくのか、ある程度プランを作り上げている。例えば、中学や高校の先生になろうとしている人がいたとするのなら、まずは教職をとり、4年生になれば教育実習へ行くのだろうと、おおよその予想がつく。私の考えとしては、将来の職業と大学生活は直結していて、大学でどのように学び動いていくのかが決まってくる。私自身も、大学入試の際に英語を生かした仕事に就きたいと考えていたため、明星大学の国際コミュニケーション学科に入学した。私はそこで、留学をし、英語力を上げ、将来の仕事のため、たくさんのキャリアプランを積もうと考えていた。しかしながら、実際にはそう計画通りに物事は進まない。新型コロナウイルスの影響で私は留学へ行くことができなくなったのだ。そこで私は諦めるのではなく国内で英語学習ができる方法を模索した。私が主に行なったのはオンライン英会話である。オンライン英会話は自分のしたい時間に行うことができさらに自分の話したいことが気軽に話せるという利点がある。また、サマースクールと呼ばれる国際コミュニケーション学科のフィールドワークを履修した。サマースクールとは簡単に言うと、様々な国の学生とグループを組み、日本の小学生に英語を教える英語教育プロジェクトである。ここでの活動はすべて英語である。国際ボランティアとして参加する世界各国の大学生との対話はすべてオンラインであったが、私にとって非常に良い経験となった。このプロジェクトで英語を使う機会として、授業内や子供たちに用意する授業作成のミーティングなどが挙

げられる。基本ほとんどが日本語を使わず、拙い英語でも失敗を恐れず、一生懸命相手に伝えようとするのが大切であり私自身の成長でもあった。当初の留学へ行きたいという目標は達成できなかったものの、留学にかけていたエネルギーを国内での英語学習に注いだ。このように私と同じように自分の思い描いていたものとは違う学生生活・人生を送っている学生もいるだろう。「日本学生支援機構の最新の『日本人学生留学状況調査』」によると、2018年度に海外へ留学した学生（高専以上）は約11万5000人。09年度以降、一貫して増加していることから、20年度も10万人以上が留学していた可能性が高い」（日経テレコン、2021、p. 1）。しかしながら、その10万人のほとんどは渡航制限により留学には行けない状況が続いた。その学生は、いったい何でつまずき、コロナの影響も含め、どのような経緯で卒業後の進路を決定していったのだろうか。私はそれを本研究で明らかにしていきたいと考えた。一方、大学生の中には自分の思い描いていた大学生活が送れた人もいよう。その人たちは何が思い描いていた生活を送る要因となり、どういった気持ち／生活環境の変化を遂げながら自身の将来像へと近づいていったのかを明らかにしていこうと思う。

次に、本研究に取り組むことにした二つ目の理由について述べていく。学生は新しい大学生活に向けて心機一転し、期待感で夢を率直に考え、大学生活の目標設定を高く持ちすぎる傾向がある。目標設定を高く持つことは決して悪いとは言っていないが、そのせいでかえって自分の首を絞めたり、途中で道を踏み外すこともある。例えば、留学をしてTOEICで高得点を狙い、四年生になるまでには内定を決めておく必要があるだろう。しかし実際には何も実行できていないこともある。これらのように目標が達成できなかった理由は何処にあるのかをしっかりとしたデータを示し、こうならないように新しい大学生活で胸を弾ませる後輩にも伝えていきたい。

入学時に思い描いていた進路やキャンパスライフが実際には異なり卒業後の進路と変わっているという人は多いだろう。この入学時思い描いていた自分と現時点の自分のギャップはなぜ生まれるのか、どのような影響により自分の思い描いていた将来像が変化するのかを本研究では調べていく。また失敗例をもとにして、理想の大学生活を実現させるための対策も示していこうと考えている。そこで本研究ではリサーチ・クエスチョンを「国際コミュニ

ケーション学科生は学科に入学する際、どのような志望理由があるのか。また卒業後はどのような進路を希望しているのか。」とし研究を進めることにした。大学入学時の志望理由と卒業後の進路の関係性、また、それらが変化していくプロセスについて、本研究を通して明らかにしていきたい。

第二章 概念的枠組み

本研究では研究テーマである「大学入学時の志望理由と卒業後の進路について」研究を進めていくことにした。有益な情報を得るため、大学入学時の志望理由に関連するある研究をもとに調査を行った。

私が本研究に向けて参考にした研究は”Imagined communities and educational possibilities (Norton, 2003)”である。Imagined Communities とは日本語で直訳すると想像上の共同体となるが、これは想像上の力を通じて私たちが結びついている人々のグループを意味する。例えば、東京でファッションデザインを勉強している日本の若者が英語を習い始めたとしたら、彼はニューヨークで自分が最も成功したファッションデザイナーの一人だと想像するかもしれないのだ(Norton, 2003)。想像の中で、彼は国際ファッション界の公認メンバーであり、英語はこのような未来の職業、所属先、コミュニティを得る重要な手段の一つと位置付けられる。簡単に言うと、彼は英語を学ぶことによって、将来の職業の幅が広がり、想像上で彼は成功する近道を思い描くようになる。要するに、自身の将来のために英語学習に投資しているのである。それは、現時点ではその機会(将来やってみたいこと、目標など、本文中の彼で言うならニューヨークで国際ファッションデザイナーの一員としてファッション界を盛り上げ、活躍していくこと)に触れることはなかったとしても、Imagined Communities は自分の思い描く想像アイデンティティ(Imagined Identities) 実現のために重要なのである。また、Imagined Identities は現時点では実現化されているものではなく、Imagined Communities は現時点ではアクセスしやすいものでもない。しかし私たちは日常生活の中で、想像によって具体的かつ直接的にその存在を感じることができるのだ。例を挙げると、近所のコミュニティであったり、職場、教育機関などが含まれている。ファッションデザイナーを目指す彼は、海外で成

功させるなら、まず英語を学ぶ必要があり、想像アイデンティティ実現のために一番直接的に感じることができるのが教育機関である。また、彼のバイト先がファッション関係であるのなら、そのファッションについて学んだり、語り合えるコミュニティの中でファッションデザイナーとしてのアイデンティティを構築している。

Norton (2003) は想像上の中で、自分の思い描いている将来を実現させるためには何を武器としていきどう学んでいくのかを見極める必要があると主張している。本研究では、Imagined Communities を概念的枠組みとして、国際コミュニケーション学科の学生は、入学したときに卒業後どのような進路先を思い描き、それを少しでも達成に近づけるため、どのような学び・行動(投資)をしていくのかをより詳しく調査していく。

国際コミュニケーション学科に入学してくるほとんどの学生は、外国語を学ぶために入学を志望する。ではなぜ、英語や中国語を学びたいのか。第二言語習得の動機づけを示していく。第二言語習得または応用言語学部分野では外国語を学ぶ要因として、二つの動機づけが存在することが明らかにされている。一つ目が統合的動機付け(高橋、2017、p. 61)である。これは、「異文化を学んでみたい」「留学をしてみたい」「いろんな人と交流を持ちたい」とその言語を話す人々と交流したいがためにその言語を学びたいという動機付けである。私自身も国際コミュニケーション学科に入学を決めた理由として、留学に行き、現地の人々と交流したいという統合的動機づけを強く持ち英語を学んでいた。私のゼミ生のメンバー全員もこの学科に入学を決めた背景には統合的動機付けが強いことが分かった。二つ目は、道具的動機づけ(高橋より、2017、p. 61)である。この動機づけは、主に TOEIC や中国語検定の点数が高ければ、大学から手当金が付くなど、就活の際に外国語ができると役に立つ、自身の利益になるといったものがこの動機づけにあたる。道具的動機付けでも非常に強い意志があれば、外国語学習において大きな影響をもたらし、外国語習得につながると明らかにされている。このことから、統合的動機付けも道具的動機付けも大きな学習における差は生じず、いずれも外国語学習への大きな期待が持てることが分かった。これらの関係も深掘してデータを示していく。

就職活動における進路変化や心情の変化については、「大学生の進路決定

と現在指向」(園田、2003、pp. 63-70) の概念を使用する。この研究は、時間的展望に関わる研究であり、主な結果の一つとして現在指向、未来指向と充実感が深く進路決定に関わってくることを示している。研究結果を示す前に現在、過去、未来指向とは何であるのか示していく。現在指向とは、現在(大学生活で)行ってきたことは将来の自分に直結し深くかかわってくることを示している。心理用語に現在指向バイアスと呼ばれるものがある。現在指向バイアスとは未来の利益よりも、目先の利益を優先してしまうことである。大学生活においても現在指向バイアスが深く関係している。例えば、大学生活に何か頑張ってきた人、趣味や特技に時間を費やした人は、その経験や過程が強みとなり、将来の職業にもその強みが評価され多大なる利益が得られることが園田の研究では明らかにされている。つまり、大学生活に「面倒くさいから、楽をしたいから」と言っ、何もしない人よりも、何か熱中できるものや使命感や責任感を持って何かに取り組んでいる人のほうが、その結果として将来大きなものが獲得できるのだ。一方、未来指向とは、未来の無限の可能性を信じ、想像の世界で未来のビジョンを鮮明に描きながら前に進んでいくことである。また、現在指向、未来指向はそれぞれ、先述した Imagined Communities (想像コミュニティ) と Investment (投資) の概念とも関係していることがわかる。未来指向と Imagined Communities は密接な関係にあり、そして未来志向の結果の尺度が高ければ、それに伴い Imagined Communities もより鮮明に見えてくると同時に現在の取り組み・努力(投資、Investment) も活発になる。また、園田(2003) は過去指向と未来指向は対の関係にあると述べている。つまり、いつまでも過去にとらわれ、昔の失敗を後悔してばかりいたり、過去の自己に対する評価が低いままだと、現在の大学生活における学び、そして、就職活動といった活動においても、なかなか一步を踏み出せないというケースも多くみられている。今説明したように、現在指向、過去指向、未来指向の度合いをより細かく調査・測定するために園田は、表1から3に紹介されている複数の質問項目を用意した。表1の時間的指向についての因子分析の結果は主に現在指向と未来指向を示している。また、表2については表1の現在指向の項目をより詳しく鮮明に映し出すために用意された質問項目である。私なりの考えでは、現在指向とは充実感と密接に関係しているものである。充実感とは主に、何か熱

中、集中しているものがあることや、安定、満足のできる毎日を過ごしている状態を指す。つまり、これらの熱中・集中因子が高く、安定・満足因子も高ければ、充実感の尺度は高いものとなり、現在指向も必然的に高くなることが予想できる。園田(2003)によると、現在指向が低い場合に充実感が低くなっており、現在指向がもっとも充実感と関係があるということがわかる。おそらく就職活動をしている間は、より不安で将来のことで悩んでしまうことが多いと安易に想像できるだろう。それらの精神的な問題も明らかにしていくため現在指向(充実感の因子)に関わる質問項目を用いて、各研究対象者の心理状態を確認していくことにした。最後の表3については過去指向の度合いを測定するために設けた質問項目が含まれている。園田(2003)の研究では、これらの質問項目を使って、18～23歳の大学生68名の1、2年生を対象にアンケート(表1.2参照)を実施したところ、「1、2年生においては毎日の充実感は今現在指向と高い相関があり、将来指向は相関がなかった。さらに現在指向は進路決定に対する自己効力感とも相関が高く、現在を重視することは現在の充実感にも将来の進路決定にも肯定的な役割を果たすことがわかった。」(園田、2003、p.66)とまとめている。

表1 時間的指向についての因子分析の結果

1. 自分なりの生き方を大事にしている	現在指向
2. 自分に正直に生きている	現在指向
3. 結果はどうあれ、自分で試みることが大事である	現在指向
4. 今を一生懸命に生きている	現在指向
5. 目標を達成するためには、努力し続ける	努力因子
6. 要求を実現させるためには、どんな努力も惜しまない	努力因子
7. 大体の将来計画がある	未来指向
8. 将来の目標がある	未来指向
9. 将来は漠然としていて、つかみどころがない	未来指向

表2 充実感尺度の因子分析の結果

1. 今、必死で頑張っていることがある	熱中・集中因子
2. 熱中できることがある	熱中・集中因子

3. 毎日が空しく過ぎていく	熱中・集中因子
4. 責任をもって果たしている社会的な役割がある	熱中・集中因子
5. 時間を持って余すことがよくある	熱中・集中因子
6. 打ち込める興味を持っている	熱中・集中因子
7. しようと思うことが頭に次々と浮かんでくる	熱中・集中因子
8. 毎日毎日がむなしい	安定・満足因子
9. 大切な人との関係はますますうまくいっている	安定・満足因子
10. 生活の中で生きる喜びや実感を味わっている	安定・満足因子
11. 将来が不安で、居ても立ってもいられない気持ちになる	安定・満足因子
12. 経済的な不安である	安定・満足因子
13. 最近友達が増えた	安定・満足因子

表3 過去指向についてのアンケート

1. 過去の自分を受け入れることができる。
2. できることなら昔に戻りたい。
3. あの時ああしておけばよかったと後悔する。

また、園田（2003）は就職活動をしている4年生にも、進路確定状況と時間的指向性の関連を調査するため、同様の同じアンケートを実施した。質問項目としては、表1、2のアンケートに加え、過去に関する項目を追加した（表3）。この項目を入れた目的としては、上記にも述べたように、いつまでも過去にしがみついていないか、次への一歩に踏み出せているのかを明確にするためである。やはり、進路選択において過去のことは切り離せないものであり、現在と過去は密接に関係している。園田は、その大学生たちが後悔や失敗をどのようにして克服していったのか、乗り越えていったのかを明らかにしていった。

結果として、4年生は未来指向と現在指向が進路選択、就職活動に対する自己効力感に関連していることが明らかにされた。つまり、将来の展望は現在を重視する現在指向に深くかかわってきて、現在の充実度が高いと進路選択の未来指向も高まる。この結果は先述のNorton（2003）の研究結果とも一貫する。また、園田（2003）は面白い結果がもう一つ明らかにした；「興味深いのは、過去指向がすべての尺度と負の相関を示していることである。進路を決定しなければならないときに過去〔の負の経験〕にとらわれているこ

とはマイナスの影響をもたらすといえよう。」(園田、2003、p. 68)と園田は論述している。この研究結果をもとに実際に私も過去指向、現在指向、未来指向の三つの観点を用いて4年生にアンケートを実施し、それぞれの時間的指向性が大学生活のどの要因で影響するのかを調べていくことにした。

第三章 メソドロジー

3.1 研究フィールド

本研究のテーマである「大学入学時の志望理由と卒業後の進路について」に関わるデータを収集するにあたって、明星大学国際コミュニケーション学科を研究フィールドとし、データ収集を行った。

3.2 研究対象者

本研究を始めるにあたり、明星大学国際コミュニケーション学科生を研究対象者にした。学年は主に就職活動を行っている4年生である。様々な視点から分析したいため、三年生の就職活動を行う前の三年生の8月からインタビューを行い、男女2人を研究対象者に選んだ。

Aさん(4年生) 中国語への関心がある。とても気さくな性格。また、英語にも関心があり、入学時には中国語も英語も習得したいというほどの勤勉な学生。彼を選んだ理由としては、大学生活でどのようなことをしていたのか気になったからである。

Bさん(4年生) 彼女も中国語を履修している。たくさんの交流関係があり、だれからも好かれる性格。二年生の時には台湾に半年間留学へ行くことを考えており、異文化への理解や関心があった。彼女を研究対象者にした理由は、コロナ禍の間留学へ行くことができなかったが、その間どのような学生生活を送っていたのか私が個人的に知りたかったからである。

3.3 研究手法

研究手法は半構造化インタビュー(寺下、2011)を採用し、あらかじめ質

問を用意し、その都度相手に合わせて質問を追加していくような形式をとった。また、データを分析し、分析結果に基づき仮説を生み出す質的研究を行った。解釈的アプローチに視点を置き、各研究対象者の主観を大切にしながら研究を行った。また、インタビューの際には、すべての会話を録音し、重要な点や興味深いと思った点を深く掘り下げてデータを収集した。一回のインタビューでは1時間ほど費やし、各自3回ほどインタビューを実施した。その軸となった質問内容が以下にある。

次の4つは入学当初の1年生のことを思い出してもらいながら、インタビューを行なった。

- ・なぜ、国際コミュニケーション学科に入学しようと思ったのですか？
- ・入学時はどのような職に就きたかったですか？
- ・その職に就きたかった理由は何ですか？
- ・あなたのその将来像を実現するために、入学時にはどのような大学生活を思い描いていましたか？

冒頭の4つの質問は、どのような志望理由を持ち国際コミュニケーション学科に入学したのか、また、入学してからの大学生活の計画やどのように過ごしていきたいのかなどをインタビューした(例：外国人の友達をたくさん作りたいたとか、GPAは4.0以上で認定交換留学を行いたいなど)。加えて、入学した当初はどんな夢や将来を思い浮かべていたのか、またその理由も明らかにするためにこのようなインタビュー内容を設けた。

そしてここから紹介するのは実際に就職活動を行っている期間中に研究対象者たちにしたインタビュー質問である。

- ・現在、卒業後の進路は何を希望していますか？
- ・その職に就きたかったきっかけは何だったのですか？
- ・(もし入学時の将来像と異なっていた場合)なぜ、やりたい職が変わったのですか？
- ・入学時思い描いていた大学生活は実現できましたか？

これら四つのインタビュー質問は、入学時思い描いていたことと違いがないのかを明らかにするために用意された。4年生の時も卒業後の進路が変わっていない場合は、なぜその進路にこだわり続けているのか、その固い意志はどのようにして生まれたのかを聞くこととした。一方で、入学時と4年時に差異が生まれた場合、なぜ将来の就きたい職業が変わっていったのか、またそのきっかけは何処にあったのかを調査することにした。

また、本研究ではインタビューに加え2名の研究対象者であるもののアンケートも並行して実施した(アンケート調査票については p. 7, p. 8の表 1.2.3を参照)。このアンケートは実際に就職活動を行っている時期に行い、紙を配布し筆記方式で、あまり考えず率直に回答してもらった。現在指向、過去指向、未来指向の三点が就職活動においてどのような影響を与えたのかを RQ1の結果と織り交ぜながら調査していくこととした。

3.4 データ分析方法

データ分析方法として、AさんBさんのそれぞれの入学時の Imagined Communities、Imagined identities、そして、それを実現するための投資はどのようなものなのか念頭に置きながらデータを読み取り、コーディングの手法を用いて分析した。また、ほとんどの国際コミュニケーション学科に入学してくる学生は、外国語を学びにくる。それは、いったいどのような動機付けに値するのか、研究対象者の経験をもとにどのような経緯で外国語を学ぼうと思ったのか明らかにすべくデータを分析した。就職活動の際には入学時の Imagined Communities は今も思い描き続けているのか。もし仮に、変化が生まれた場合、現在指向や未来指向、過去指向を測る時間的指向性の概念的枠組みに基づいて、いったいどこからその変化が生じたのかそのプロセスを紐解いていく。

第四章 データ分析結果

本章では、この研究のリサーチ・クエスションである、「国際コミュニケーション学科生は学科に入学する際、どのような志望理由があるのか。また卒業後はどのような進路を希望しているのか」答えを見つけるべく学生2

名にインタビューし明らかになったことを関連データと共に紹介していく。

4.1 Aさんのケース(4年生)

Aさんが国際コミュニケーション学科に入学した理由としては、語学スキルを学びたいためであった。具体的に中国語と英語の両方を習得したいと考えており、自然と話せるようになることを目標としていた。学ぶ手段としては、第一に留学を考えていた事を明かした。このことより、Aさんの外国語習得の動機づけは、留学をしてたくさんの人と交流を持ちたかったことから強い統合的動機づけ(高橋より、2017、p. 61)を持っていることが分かった。留学先は中国で、2、3年のうちに留学をしたいと考えていた。またその他にも、通っていた高校に指定校推薦枠があり、自分の学力に合わせて入学を決めたという。

私「なぜ、国際コミュニケーション学科に入学しようと思ったの？」

Aさん「大学に行く際、留学するのが目標だったんだ。いろんな人と関わりながら語学を学びたかったから。高校からの指定校推薦もあり、学力が自分にぴったりで、留学制度も充実していたからね。」

(インタビューデータ、Aさん、2021年8月31日)

Aさんはまだ入学時、4年後の自分の未来について大まかなイメージしか持っておらず、明確に卒業後、何をしたいのかは決められていなかった。時間的指向性の概念的枠組みの中でこれを捉えると、確かに1年生の将来指向の水準は低い傾向にあったことがわかる(園田、2003、p. 66)。園田(2003)は自身の研究結果として、1、2年生の毎日の充実感は現在指向と高い相関が見られると述べている。しかし、将来のことに視点に置くアンケート結果では、未来指向性は全く確認できなかった。これは自然なことであり、1年生は入学してからの新しい希望と期待感で胸を膨らませ、充実した大学生活を送っている人が多い。しかし将来のことは見ると1年生から就職先のことを決めている人などそういない。ただ、Aさんの頭の片隅には海外で活躍できる仕事に就きたいという夢があったと語った。その理由としては、中国語学習動機と同様に、海外の人とコミュニケーションを取りながら行う

仕事に憧れを持ったからである。つまり、Aさんが大学一年次に持っていた Imagined Communities は、留学先の中国で知り合う人々であったと言える。Aさんは想像上で将来の理想の姿を作り上げた。それは留学先の異文化体験、語学力向上そして、自分の成しえた知識をもとに、将来も海外の人とコミュニケーションを取りあう職に就いている自身の姿である。

私「入学時にはどのような職に就きたかったの？」

Aさん「何に就くとか考えていなかったけど、海外の人と交わる仕事に就きたいと思っていたよ。」

私「それはなんで？」

Aさん「一日中座ってパソコンをいじるような仕事はしなくなかったから、人とコミュニケーションが取れる仕事に就きたいんだ。どうせなら、海外の人と話しながら、良いかな。」

(インタビューデータ、Aさん、2021年8月31日)

Aさんは大学生活では、自分の語学力向上のため留学先で様々な学生と触れることを目標に掲げていた。また、英語圏や中国語圏の両方へ行くことを決めていた。時間的指向性においては、1年生の毎日の充実感は現在指向と高い相関が見られること園田(2003)の研究で示されており、それは将来の進路決定にも肯定的な役割が示される。つまり、たくさんの目標を抱き、大学生活における幸福度や充実感を高めることで、Aさんの思い描く Imagined Communities は肯定的なものへと変わっていくことが分かった。

私「その将来像を実現させるために、入学時にはどのような大学生活を思い描いての？」

Aさん「第一に留学へ行くことを思い描いていたよ。もちろん、英語圏と中国語圏のどっちも行こうと考えていたよ。一年の時には認定交換留学のためにとにかく成績を上げることを考えていたね。」

(インタビューデータ、Aさん、2021年8月31日)

ここまでのデータ分析結果から明らかになったのは、Aさんの外国語習得

および入学志望動機の主な理由としては、海外の人と交流を持ちたかったからということだ。よって、Aさんの外国語習得の動機は、統合的動機付け（高橋、2017、p. 61）であった。そのため、Aさんは入学時にたくさんの目標設定を行った。例えば、中国圏と英語圏の両方の留学を希望し、ある一定のGPAを保持することで認定交換留学の資格をもらうことを目標に掲げた。これは、一年生の毎日の充実感は現在指向と高い相関性があるという園田（2003）の研究結果と一致する。そして、Aさんの思い描く卒業後の自分の将来像（Imagined Identity）を覗くと、Aさんは海外の人とコミュニケーションを取りあいながら行う仕事に就くことをイメージしていた。一年生の毎日の充実感は現在指向と高い相関が見られ、Imagined Communitiesと共にImagined Identityもより肯定的なものへと変わっていく。なぜ、Imagined Communities/ Imagined Identityは肯定的なものへ変わっていくのか。そこには次のような要因があることが分かった。当時、Aさんが熱中しているものや力を注いでいたのは、留学先での異文化交流や外国語学習だが、そこにやりがいやポテンシャル、喜びや楽しさを感じていると、その延長線には新たなキャリアが獲得できる可能性が見据えられていたと考えられる。

ここからは、実際に4年生の就職活動を行っている時期にインタビューを行い、データ分析の結果明らかになったことを述べていく。結論から言うと、Aさんの就きたい仕事は、入学時に考えていたものと同じであった。それは、海外の人とコミュニケーションを取りながら行う仕事である。しかし、入学時考えていた漠然とした夢とは違い、明確なものへと変わっていった。具体的に、2022年4月のインタビュー当時、Aさんが希望していた企業は、バイク関係の仕事であった。それはバイクの部品を作ったり、グローバル進出している企業であるため、海外とのつながりや取引も多いと語った。具体的には、中国圏に取引している企業があり、自分の中国語のスキルを活かしながら働ける進路を希望していた。

私「卒業後どのような進路を希望している？」

Aさん「バイクが好きだから、バイク関係の仕事を希望している。具体的には、バイクのねじを取り扱っているところで、日本製のもの是非常に精度が高く価値のあるものとして販売できるんだ。ちっちゃな部品

だけど、小さいからこそ、基盤を作っていくのに大切だし、しっかり土台を作っておかないとすぐ壊れちゃうんだ。だから結構海外進出していて、グローバルな企業だからそこへ行ってみたい。・・・」

(インタビューデータ、Aさん、2022年4月14日)

Aさんが将来バイク関係の仕事へ行きたいと思ったきっかけは、大学生活にあった。Aさんは二年生の時にバイクの免許を取り、よく友達と夜に走りに行くことがあったと語った。自分の好きなバイクに乗りながら、友達と話で盛り上がれることの喜びを感じたことから、ぜひたくさんの人にもこの喜びや楽しさを知ってもらうため、まずはより良いバイクを提供したいと感じたのがAさんがこのような卒業後の進路を考えるきっかけとなった。

私「なんで、バイク関連のほうに進みたいと決めたの？」

Aさん「二年生の時に、免許を取得して、仲間とよくバイクで出かけに行っていて、その時が一番楽しいと思えたから。みんなにも共有したくて、自分もそういうのを与えられる仕事についてみたいと思ったからかな。」

(インタビューデータ、Aさん、2022年4月14日)

就活状況のインタビューを終えて明らかになったことは、Aさんの卒業後の進路は入学時考えていたものと変わっていなかったということだ。しかし、将来の夢は漠然としたものではなく、明確なものへ変わっていた。それは、バイク関係のお仕事であり、細かな部品などを製造する会社を希望し、本当にやりたいことが決まって、就職活動が行いやすくなったことが分かった。日本で作るバイクの小さな部品は、世界にとって大きな需要があり、海外のやりとりも多いことから、グローバル進出している企業を就職先として考えるようになった。また、そこで入学時の Imagined Communities にもあった自身の中国語のスキルを活かしながら働ける進路に決めた。Aさんのバイク関係の仕事に就きたいと決めたきっかけとしては、大学生活の中にあった。大学2年生の時にバイクの免許を取り、行動の範囲が増えて、仲間とよく走りに行った。そこで、いろんな話をして盛り上がったり、バイクで

走れる喜びを感じ、将来もバイクに関わっていきたく感じたのであった。

また、Aさん個人に第2章より表1、2のアンケート（園田、2003、pp. 64-67）を取ってみることにした。このアンケートはAさんの就職活動を行っている時期にデータを集めたものである。これらの質問項目によって、Aさんの就職活動中の気持ちの変化や肯定的に望んでいたのかを測ることができる。

表1 時間的指向についての因子分析の結果

1. 自分なりの生き方を大事にしている	現在指向	はい
2. 自分に正直に生きている	現在指向	はい
3. 結果はどうあれ、自分で試みるのが大事である	現在指向	はい
4. 今を一生懸命に生きている	現在指向	いいえ
5. 目標を達成するためには、努力し続ける	努力因子	はい
6. 要求を実現させるためには、どんな努力も惜しまない	努力因子	はい
7. 大体の将来計画がある	未来指向	はい
8. 将来の目標がある	未来指向	はい
9. 将来は漠然としていて、つかみどころがない	未来指向	いいえ

表2 充実感尺度の因子分析の結果

1. 今、必死で頑張っていることがある	熱中・集中	はい
2. 熱中できることがある	熱中・集中	はい
3. 毎日が空しく過ぎていく	熱中・集中	いいえ
4. 責任をもって果たしている社会的な役割がある	熱中・集中	いいえ
5. 時間を持って余すことがよくある	熱中・集中	はい
6. 打ち込める興味を持っている	熱中・集中	はい
7. しようと思うことが頭に次々と浮かんでくる	熱中・集中	はい
8. 毎日毎日がむなし	安定・満足	いいえ
9. 大切な人との関係はますますうまくいっている	安定・満足	はい
10. 生活の中で生きる喜びや実感を味わっている	安定・満足	はい
11. 将来が不安で、居ても立ってもいられない気持ちになる	安定・満足	いいえ
12. 経済的な不安である	安定・満足	はい
13. 最近友達が増えた	安定・満足	いいえ

表1を見ても分かる通り「いいえ」が選択されたのは「今を一生懸命に生きている」のみであった。これはつまり、現在指向、未来指向の水準がともに高いことを表している。Aさんは現在指向と未来指向の相関が高い分、前向きな姿勢で就職活動や進路選択に望んだと言えるだろう。園田(2003)によると、将来の展望は現在を重視することから始まる。将来と現在は切り離せないものである。つまり、将来やりたい仕事、就きたい職業とは、現在に熱中しているもの、興味を抱いているもの、実際に行っている行動から派生してくるものだと考えられる。表1の努力因子の質問項目5、6を見ると、共に「はい」の肯定的なものであった。園田(2003)によると、今現在何かに集中して取り組むことが進路を選択するための自己効力感を高める。Aさんの場合は、大学時代に熱中できるバイクを知り、仲間と旅に出かけるなどバイクに打ち込んできた。そのようなことから、将来もバイクに関わる目標を掲げていったことがわかる。また、大学生生活に携わってきたバイクの知識や経験が進路選択への自信に育まれたことから、未来指向の水準が高いと言えるのだ。現在行っている行動は未来に大幅につながってくるという結果はこの度の研究で特筆すべきことと言えよう。

次に私は、Aさんの過去指向についてアンケート結果についても見てみることにした。

表3 過去指向についてのアンケート

1. 過去の自分を受け入れることができる	いいえ
2. できることなら昔に戻りたい。	はい
3. あの時ああしておけばよかったと後悔する。	はい

Aさんの過去の因子を見ると、過去に戻りたいだったり、過去の自分を受け入れられないだったりした。ではなぜそのような結果になったのかインタビューをしてみた。

私「なんで過去に後悔しているの？」

Aさん「もともと自分は留学をするためにこの学科に入学をしたんだけど、コロナの影響で留学に行くという目標が叶わなかったんだ。も

「もちろん過去に戻ったとしても、コロナが流行るのは止められないんだけど、例えば一年生のうちから留学の準備を始めればよかったとかいろんなことを考えちゃうね。」

(インタビューデータ、Aさん、2022年5月21日)

Aさんの過去にとらわれている理由は、留学へ行けなかったことであった。Aさんは、入学時思い描いていた将来像 (Imagined Communities) は結果的に実現できなかった。将来は現在だけでなく過去にも影響することから、ネガティブな過去指向のアンケートを用意したが、結果的には実現できなかったものの、ネガティブな過去はマイナスばかりに作用するわけではない。留学に行けなかった代わりにとは一概には言えないが、例えば学習面においては、Aさんは国内での勉強に励むことにシフトした。結果として中国語検定(4級)を取得し、就職活動を行う際にそれは自分のアピールポイントとなり有利に進むことができたと言っていた (インタビューデータ、Aさん、2022年5月21日)。Aさんの入学時の外国語習得における動機付けとは、海外の人とたくさんの交流を持ちたいという統合的動機付け (高橋より、2017、p. 61) であったが、コロナ以降には就職活動の自分の武器として検定などを取っていく道具的動機付け (高橋より、2017、p61) へと変わっていったのは非常に興味深いと言える。また、私生活においては、大学生でバイクの免許を取り、バイクの魅力に気づけたのは事実であり、バイクが好きでそれを仕事にしたいと思えたなら、Aさんにとって意味のある過去であったと私は思う。

しかしながら、後日インタビューをしたところ、Aさんの就職先は結果的に、不動産に決めたことが分かった。不動産は、バイク関係の仕事が内定をもらえず、大学が支援し紹介してくれたのがきっかけであった。説明会などを実際に受け、住むことは一生かけて関わっていくことであり、その環境を自分が手助けできることはやりがいを感じられると思ったからと明かした。(インタビューデータ、Aさん、2022年10月30日)

私「バイク関係の仕事から内定はもらえた？」

Aさん「最終面接まで行ったけど、結果的に内定はもらえなかったよ。」

それでまた一から就活やり直して、今は不動産の内定をもらえたよ。」
私「バイク関係ダメだったんだね。なんで不動産のお仕事を選んだの？
どんな経緯があったのか知りたい。」

Aさん「一番最初に明星大学のキャリアセンターに行って、紹介されたのがきっかけだったんだけど、実際に説明会とか行く中で、不動産営業の仕事はお客さんの一大イベントに関わることができて、それを自分の手で手伝えることにやりがいを感じられると思ったからかな。」

私「じゃあ今の内定先には満足しているんだね。」

Aさん「バイク関係の仕事はダメだったけど、不動産は素敵な仕事で、楽しさも感じられると思うから、もう今は不動産一筋で頑張っていこうと思ってるよ。」

(インタビューデータ、Aさん、2022年10月30日)

園田(2003)は、進路を決定しなければならないときに過去にとらわれていることはマイナスの影響をもたらすと述べている。バイク関係の企業先では最終面接まで行き、Aさん自身「もう受かるな」と確信していた。しかし、結果的に内定をもらえず、Aさんはひどく落ち込んでいた。このような事があったのにも関わらず、Aさんはどのように乗り越え、また一からの就活を成し遂げたのだろうか。そこには、過去にとらわれているマイナスな影響をも覆すAさんの次のステップがあった。Aさんは新しく自分がやりたい仕事を見つけ出し、その仕事に対する喜びも見出していたのだ。不動産営業とは、Aさんのコメントにもあったように、お客さんの人生の一大イベントに関わることができる。とても大きなお金が動くので、お客様に安心して、希望通りのお部屋選びをして頂きたいと明かした。Aさんの中から、本当にお客様から「ありがとう」と言って頂けるような仕事を目指していこうとする姿が伝わってきた。

4.2 Bさんのケース(4年生)

Bさんは高校生の時に自分のやりたいことが明確ではなく、将来のやりたいことが定まっていなかった。しかし、外国や言語に興味を示し、国際関係に視点を置いている大学を当時は探していた。そんな中でも、明星大学の国

際コミュニケーション学科は国際的なことに関して充実した授業やカリキュラムが備えているということで、入学を志望したと語った。このことからBさんの外国語習得の動機付けは、強い統合的動機付け（高橋、2017、p. 61）であることが分かった。

私「なぜ、明星大学の国際コミュニケーション学科に入学を決めたの？」

Bさん「高校受験の時に、いざ私は何がしたいのかって考えたときに、将来やりたいことがわからなかったから、まずは少しでも興味がある国際関係を調べてみようと思ったのが一番最初のキッカケかな。」

私「そのあとは、どうなったの？」

Bさん「それで、色々調べてみて、国コミの授業とか留学のプログラムが充実していて、例えば2週間でフィールドワークに行けたり、留学も様々な提携校があって、調べるうちにどんどん興味がわいてきたんだ。」

（インタビューデータ、Bさん、2022年9月30日）

Bさんの入学した当初の卒業後の進路は、留学を考えていたこともあって、グランドスタッフを目指していたと明かした。グランドスタッフとは、空港内で働く地上勤務の職員のことである。具体的なお仕事としては、お客様が航空機に乗るまでに、荷物を預かったり、空港内の案内を行ったり、お客様の旅をスムーズに行うために、快適にサポートしていくサービスである。語学を活かせる仕事に就きたいと思っていたことから、まず国際コミュニケーション学科で異文化の理解や外国語習得を頑張っていきたいと考えていた。彼女が語学を活かせる仕事に興味を持った理由としては次のことが挙げられる。小学校で2週間ヨーロッパへ旅行をし、それが初めての海外の経験であり、日本とは大きく文化も歴史も建造物も異なることに驚きと新鮮さを肌で感じ、海外にとっても興味を持った。そのため、英語を話せるようになれば、自分の中の世界が広がり、世界中のいろいろな人と接する機会が多い空港で働きたいと思ったのがきっかけとなったという。Bさんは国際コミュニケーション学科に入学した当初から、将来やりたいことが明確であり、その職業に就くため大学生活のプランもしっかり考えていた。つまり、Imagined Communitiesが入学時の段階でしっかりと明確になっていたため、その後

のアイデンティティ形成や Investment（投資）は容易く、行動しやすい大学生活であった。Bさんの未来指向の水準は一年生から高い傾向にあり、時間的指向性とは異なるデータであることがわかった。

私「入学当初の卒業後の進路は？」

Bさん「卒業後はグランドスタッフを考えていたよ。」

私「グランドスタッフって何??」

Bさん「グランドスタッフっていうのは、キャビンアテンダントとは違って飛行機に乗らないで、空港内でお仕事をする人のことだよ。例えば、案内する人とかいろいろあるよ。そういう語学とかを活かせる仕事に就きたいと思っていたんだ。」

私「なんで、語学とかを活かせるようなお仕事に就きたいと考えていたの？」

Bさん「一番最初に海外に興味を持ったのが、小学校の時ヨーロッパに旅行しにいったのがきっかけで、そこでいろんな経験したことが印象に残っていて、英語を話せれば、視野も広がるし考え方も変わるから、いろんな人たちが来る空港っていう場所に着目して、ここで仕事をしたいって思ったからかな。」

(インタビューデータ、Bさん、2022年9月30日)

Bさんの入学時の計画としては、英語と中国語の履修を最大限にして、ある程度話せるようになった二年次に半年間の中国語圏の留学をして、語学力を定着させたいと考えていた。一年生の時に実際に2週間の中国語フィールドワークを経験してみて、言語だけでなく文化も触れてみたいと感じ、中国語一本で履修することに決めた。英語よりも中国語を優先させた理由としては、中学校から英語を習い始めて、英語はある程度の単語を覚えてさえいれば、相手がどんな話をしているのかわかり、何を伝えたいのかも想像はできる。これらのことも踏まえて、大学へ入学して新しい何かを勉強したいと考えたときに、一番身近に感じたのは中国語学習だったのだ。Bさんはその当時はカフェで働いていて、バイト先で留学生や中国人観光客と接する機会も多かったので、中国語が一番身近に感じたと述べた。Bさんは大学1年生

の段階で自分の思い描く将来像が鮮明に映し出されていた為、勉学に励む充実感と現在指向は高い相関が見られ、常に Imagined Communities は肯定的であることが分かった。B さんの授業を受ける姿勢を見ることで、どれだけグランドスタッフになりたかったのかその熱意が伝わってきた。

私「その将来像を実現させるために、どんな大学生生活を思い描いていた？」

B さん「最初は、大学の説明会とかで、国コミは英語と中国語の二つに力を入れてるって聞いたから、二つとも習得したいなって思っていたけど、現実を考えるとそれは結構大変で、中国語をメインに学習しようと思っていたよ。」

私「なんで英語よりも中国語を学ぼうと思ったの？」

B さん「英語って、ある程度のことは通じるし、必要最低限の日常会話くらいはできたから、それよりも大学入って新しいことに挑戦してみたって思ったから、英語より中国語を選んだの。その当時はバイト先でよく中国人の方が来て、一番身近に中国語を感じて、私が話せるようになったら幅も広がるし、一年生の時に2週間の中国フィールドワークに行ったんだけどね、そこで仲良くなった留学生がいて、もっと中国語に興味を持ったんだ。」

(インタビューデータ、B さん、2022年9月30日)

これまでに示してきたデータから明らかになったことは、B さんの入学当初の卒業後の進路はグランドスタッフで、グランドスタッフを志望した最初のキッカケとなったのが、小学校の時にヨーロッパ旅行へ行った際の日本とは大きく違った光景に驚いたことにあった。文化や歴史、建造物なども違い、まるで違う世界に居るのではないかとも思ったとのことで、世界中の人と接したいと思い、考えついたのがグランドスタッフであった。英語を話せるようになれば世界中の人と繋がれると思っていた B さんであったが、大学を入学した際に、英語よりも中国語に興味を示した。大学生活で何か新しいことに挑戦してみたいと考えた B さんは、その時、より身近に感じられた中国語に着目し、学ぼうと考えた。当時 B さんのバイト先はカフェで勤

めていたので、そこへたくさんの中国人観光客が訪れていた。そこで、Bさん自身が中国語を話せるようになれば、その中国人観光客と仲良くなることができる。つまり、Bさんは強い統合的動機付け（高橋、2017、P. 61）で中国語を学んでいたと言える。また、1年次に実際に2週間の中国フィールドワークに携わり、そこでたくさんの友達ができたと語った。これらのことより、Bさんは次のような中国語に関わる *Imagined Communities* を描いていたと考えられる。Bさんは最終的な目標をグランドスタッフとし、そのため大学で様々な経験をして、将来役に立てるように成長していくことを計画していた。グランドスタッフは英語のみなどの言語指定は問わず、様々な言語を話せる人が人材として雇用されている。そこで、身近に感じている中国語を一生懸命勉強することを決め、中国語が話せるグランドスタッフとしての将来像を思い描いていた。第二章概念的枠組みで述べたように、未来指向と *Imagined Communities* は大きく関連する概念であると言える。園田（2003）の研究によると、「1.2年生においては毎日の充実感は現在指向と高い相関があり、未来指向は相関がなかった。」（園田、2003、p. 66）が、Bさんのケースはこれに当てはまらない。授業スタイル、語学向上に本気で取り組む姿勢、2週間の中国フィールドワークでたくさんの経験ができたことを毎日の充実感として仮定すると現在指向は高いものであると言える（ここで相違はない）。しかし、「未来指向は相関がなかった」という点においてはBさんのケースとは異なる。Bさんの *Imagined Communities* はしっかりとした明確なものであり、将来の夢が1年生の段階で定まっていた。多くの人は、入学時には大まかな夢を描いており、そのために未来指向の相関が見られないと想像できるが、Bさんの場合は、グランドスタッフになるため、大学生活で何をすべきなのかが鮮明に映し出され、未来指向の相関も高いものであったと考えられる。

一年次当初Bさんは、入学時には国をまたぐような、日本だけに留まる仕事ではなく、国外と関わる仕事を考えていた。しかし、それから時を経て2年生に上がる前にコロナウイルス感染拡大で留学ができなくなり、卒業後の進路に関する考え方は変わっていった。今まで感染症のことを考えたことがなかったが、行き来ができなくなる世界を目の当たりにした。グランドスタッフや旅行会社なども将来の就職先候補として調べていたBさんであっ

たが、感染症一つだけで、仕事がなくなる職業はあまり安定しないと考えが180度変わった。結果としてコロナウイルスなどの感染症に全く影響されない、金融業を選択した。

コロナウイルスは、長期にわたって日本経済及び企業に損害をもたらしている。そのためBさんと同様にコロナウイルスの影響で、進路変更を考える学生が少なくないのは事実であり、その根拠も明確に示されている。Bさんの希望していたグランドスタッフは、コロナウイルスが流行りだした当初から、すでに経営に影響を受けており、航空業界は、新卒採用にも多大なる影響を与えた。就活生にとっては今後の景気動向や世界経済の変化は、就職環境を悪化させることから、進路変更することも珍しくないだろう。もしも、Bさんがそのまま進路変更をせずに、グランドスタッフに内定をもらったこととした場合、経営悪化の人員削減のため内定を取り消されることがあったかもしれない。また、入社してから今後に影響が出る可能性もある。この可能性も小さいものではないので、Bさんのように情報収集をきちんとして、社会とコロナウイルスはどう関係しているのか、ウイルス感染拡大は社会システムにどのような影響を及ぼすのか、Bさんが以下のデータで語っているように今後も真剣に検討していく必要があるだろう。

私「就職活動をしている現時点で、どんな就職先を希望している？」

Bさん「もともと、1年生の時には世界を股にかけて仕事をする国際職に憧れを持って、将来はグランドスタッフになりたいと思っていたけど、コロナウイルスが流行って、留学できなくなっていろんな経験ができなくなったっていうのももちろん理由としてもあるけど、それ以上に感染症一つでって言ったら変だけど、人員削減だったり、休暇期間を取らされたり、安定した職業ではないなって思ったんだ。」

私「じゃあ、今は違う職業に就きたいって考えてるの？」

Bさん「そうだね。それでいろんな職種を調べたよ。アパレル、出版、コスメ会社、旅行会社とか。でもそれも全部さっき言った感染症で仕事がなくなるケースが多いからさ。それで感染症が流行ったとしても、絶対みんなが必要としているお仕事は何か考えたときに、一番最初に思ったのが金融業なんだ。」

(インタビューデータ、Bさん、2022年9月30日)

その当時、Bさんは金融業と医療で迷っていたが、よりやりがいを感じられると思ったのが金融業であった。医療も金融業も誰かの役に立つ必要不可欠なものである。社会の貢献度も二つを比べるのはおかしいが同じくらい重要なものである。そこで一番の決め手となったのは、次の点にあった。医療の方だと受付に来た患者さんと一対一で接する。一方で、金融業は国民規模で仕事に携わるため、より多くの人の役に立つ仕事は金融業であるということがBさんの認識であった。金融とはBさんにとって、日本経済を担うものであり、貢献する人口の規模が大きいため、金融業を選んだと明かした。

私「金融業を選んだキッカケは何だったの？」

Bさん「医療と金融業で迷っていて、二つとも日常生活において絶対なくなることはないし、必要不可欠。でも医療は患者さんと一対一でその患者さんに寄り添うことができる。それも客観的に見れば立派なお仕事で憧れるけど、私の個人の意見としてはより多くの人の役に立つ仕事に就きたいって思っていたから、そう考えると国民規模で仕事ができる金融業を選んだんだ。」

(インタビューデータ、Bさん、2022年9月30日)

また、Aさん同様、Bさんに対しても園田(2003)が紹介する時間的指向性に関わるアンケート(pp. 64-67)の回答を依頼した。すると次のような結果となった。

表1 時間的指向性についての因子分析の結果

1. 自分なりの生き方を大事にしている	現在指向	はい
2. 自分に正直に生きている	現在指向	はい
3. 結果はどうあれ、自分で試みることが大事である	現在指向	はい
4. 今を一生懸命に生きている	現在指向	はい
5. 目標を達成するためには、努力し続ける	努力因子	はい

6. 要求を実現させるためには、どんな努力も惜しまない	努力因子	はい
7. 大体の将来計画がある	未来指向	はい
8. 将来の目標がある	未来指向	わからない
9. 将来は漠然としていて、つかみどころがない	未来指向	いいえ

表2 充実感尺度の因子分析の結果

1. 今、必死で頑張っていることがある	熱中・集中	はい
2. 熱中できることがある	熱中・集中	はい
3. 毎日が空しく過ぎていく	熱中・集中	いいえ
4. 責任をもって果たしている社会的な役割がある	熱中・集中	はい
5. 時間を持って余すことがよくある	熱中・集中	いいえ
6. 打ち込める興味を持っている	熱中・集中	はい
7. しようと思うことが頭に次々と浮かんでくる	熱中・集中	はい
8. 毎日毎日がむなし	安定・満足	いいえ
9. 大切な人との関係はますますうまくいっている	安定・満足	はい
10. 生活の中で生きる喜びや実感を味わっている	安定・満足	はい
11. 将来が不安で、居ても立ってもいられない気持ちになる	安定・満足	いいえ
12. 経済的な不安である	安定・満足	いいえ
13. 最近友達が増えた	安定・満足	いいえ

現在指向性に関わる質問に対しては、ほとんどが肯定的な回答であった（13問中11問が肯定的な意見）。表2の7番「しようと思うことが頭に次々と浮かんでくる」というのは、将来の夢が定まっていないことではなく、Bさんであれば、金融業の中で様々な仕事をしてみたいという意味で「はい」と回答された（インタビューデータ、Bさん、2022年9月30日）。また、表2の13番「最近友達が増えた」ことに関しては、「いいえ」と述べている。客観的に見ると、友人関係がうまくいっていないのかと見ることもできるが、そうではなく、今まで関わってきた友人を優先して交流していきたいのだとBさんは述べていた（インタビューデータ、Bさん、2022年9月30日）。園田（2003）によると、将来の展望は今を重視する現在指向と両立したときに、最も現在の充実感が高く、肯定的に進路選択が行える。Bさんの研究結果で

も同様に、現在の充実感が高くより前向きな気持ちで就職活動が行えたというデータが得られた。実際に、金融業界の面接はとても面白かったと述べていた（インタビューデータ、Bさん、2022年9月30日）。それは、Bさんが求めている事業形態や仕事内容が、志望する会社とマッチしていたためである。結果的にBさんは金融会社から内定をもらい、そこへ勤めることに決めたという。

第五章 おわりに

データを記述した2人を見ると、2人とも入学前に Imagined Communities があり、外国語を使った仕事に就きたいを将来像としてイメージし、大学生活の中で様々な学習内容を計画しており、外国語を学びたいという目標は共通していた。

現時点での卒業後の進路に視点を置くと、2人は入学時と異なる進路を選んでいった。その理由としては、様々なものがあった。一つ目の要因としてはコロナ禍の影響により予定していた留学がいけなかったことである。二つ目に、大学時に熱中できるもの（Aさんのケースからバイクへの熱中）が見つかったこと。そして三つ目が、入学時にはただ単に外国語を学ぶから、将来は外国語を用いた仕事に就くであろうと考え、目標が漠然であったこと、また、自分が本当にやりたいことが見つかったことであった。このように見ると、入学時思い描いていた進路は実現しづらいことが分かった。例えば、しっかりした Imagined Communities があったとしても、様々な困難な壁を乗り越えなければ、実現できないことが分かった。また、入学時自分の思い描いていた将来像があったとしても、やりたいことは在学中に変わっていくこともわかった。特にコロナウイルスは学生たちに多大なる不安感とストレスを与え、学生たちは肉体的そして精神的にも追い込まれた。私の同級生の中で、コロナが原因で自分の求める学生生活とは異なり、大学を辞める友達もいた。

私がこの研究を通して新しく大学に入学してくる新生に伝えたいことは、外国語を使った仕事に就きたく、そのために大学で語学力を伸ばしたいという Imagined Communities が明確にあったとしても、現実はその簡単

に実現できないという点だ。現にそれはこの2人のデータにより証明されている。例えば、コロナの影響により留学したいと思っていたができなかったというものがあるが、今後コロナのように自分の思い描く大学生活を妨げる大きな要因は来るかもしれないし、それが来ないという保証はない。もし自分の思い描く将来像を阻害する要因が来た時にどうやって対応すればいいのか、ほかにもっといい方法がないのかを選択肢として多く持っておく必要がある。「できなくなったから、それはもうできないよね」で終わらせるのではなく、できないからそのあと自分は何をすべきであるのか考えることが必要である。また、仮に思い描いていた大学生活がほとんど達成できたという人でも、就職活動でつまづくこともある。一生懸命進路のために頑張ってきた大学生活が、就職活動で諦めるのは非常にもったいない。このようなこと以外にも妨げる要因はいくつか在学中に起こるだろう。そうならないためにも一つ一つ困難な壁を乗り越える必要がある。大学生活は遊びであるとはほとんどの学生が思っているであろうが、そんな簡単にはうまくいかない。本当にやりたいことがしたいのであれば、悔いない大学生活を送るべきである。

研究の限界については以下のことにある。第2章の概念的枠組みで使用した表1、2、3のアンケートは本来であれば、1年生から研究に取り組み、各学年で1回ずつ行い、どう変わっていったのかをデータとして残しておく必要があったが、私が3年生の時にこの研究を始めたので、それは難しく、研究対象者には昔のことを思い出してもらいながらアンケートに取り組んでもらった。次にもし同じ研究をするのであれば、研究結果は1年生から毎年行い、どこで進路や考えが変わっていったのかより詳細に研究したと考える。

参考文献

【和書】

高橋勝忠 (2017). 『英語学を学ぼう 英語学の知見を英語学習に活かす』東京：開拓社

寺下貴美 (2011). 「第7回 質的研究方法論～質的データを科学的に分析するために～」.

日本放射線技術学会雑誌. 第67巻(4), 413-415.

【インターネット】

園田直子 (2003). 『大学生の進路決定と現在指向』<https://kurume.repo.nii.ac.jp> 2022年4月11日

Norton, B. (2003). Imagined Communities and Educational Possibilities: Introduction.

Journal of Language, Identity & Education (2),4, pp. 241-249.

【新聞記事】

若山友佳、荒牧寛人. (2021年3月17日). 『コロナ禍で狂う留学大学生、国内での学びに
転身』 日経テレコン 21, p.1.